

翻訳…楊杰著『国防新論』（七）

第二編 近代国防の型式及び組織

第六章 文化組織

細井 和彦

翻訳にあたって

楊杰『国防新論』の翻訳をはじめてから、かなりの時間が過ぎ去った。本書を翻訳をしていこうと決めたころの講義名は「中国の歴史と社会Ⅰ・Ⅱ」だった。現在は、「歴史学特論」「歴史学演習」になっている。講義は演習形式になり、中国人留学生在が試みる下訳を日本人学生が補足する形式で初訳を作成してきた。当初はもう少し集中して初訳を積み上げ、さらに註釈を含めた細部の検討を進めようと思っていたのだが、試行錯誤の連続で、作業は大幅に遅れてしまっている。その責任はすべて訳者にある。遅延を反省する意味もこめて、訳文（一）～（六）の所在を明記しておきたい。

「楊杰著『国防新論』（一）」（立命館東洋史學會『立命館東洋史學』第三九号二〇一六年七月、八五―一三二頁。

「楊杰著『国防新論』（二）」（『鈴鹿大学紀要 CAMPANA』NO. 二二二 二〇一六 二〇一七年三月、一五七―一九二頁。

「楊杰著『国防新論』（三）」（『鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要 人文科学・社会科学編』（二） 二〇一八年三月、四〇九―

四七〇頁。

「楊杰著『国防新論』(四)」(立命館東洋史學會『立命館東洋史學』第四二号二〇一九年八月、三九一七三頁。

「楊杰著『国防新論』(五)」(『鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要 人文科学・社会科学編』(二) 二〇一九年三月、四三五―四六三頁。

「楊杰著『国防新論』(六)」(『鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要』第三号 二〇二〇令和二年三月、二六三―二九〇頁。

一、国防教育と国防文化

ここ数年、「国防教育」という言葉は、すでによく知られるようになった。だが、「文化」の上に「国防」の二字を加えた「国防文化」は、まだまれにしか見かけない。では「国防文化」とは何なのだろうか。

*文化侵略の目的は何か。

帝国主義者が弱小民族を侵略するための手段と方法、強大な国家が弱小な国家を侵略するための手段と方法は、あれこれあつて尽きることがない。

軍事侵略、政治侵略と経済侵略のほかに、最も凶悪どう猛で、最も悪辣で、最も徹底的な侵略手段は「文化侵略」である。軍事侵略と政治侵略の目的は、被侵略国の領土を占領して、被侵略国の政権を破壊し、侵略を受けた者たちを駆使し、支配して新しい政権を別個に樹立するのである。

経済侵略の目的は、被侵略国の資源を略奪して、被侵略国の金品を搾取することである。

文化侵略の目的は、被侵略国の人民の生活様式を変更して置き換えることであり、被侵略国の人民の頭脳を占領

することなのである。

*産業革命は労働者と資本家という大いに差がある生活様式を作り出した。

現代の戦争は、大規模な「併用戦」であるから、各種の戦争遂行のための手段は、開戦以前、開戦後、または開戦と同時に被交戦国に使用される。以前は、文化が戦争で発生させる力を、一般人はみなそれほど注意しなかつた。産業革命以後になって、生産工具の機械化と自動化により、生産力を無限的に膨張させ、人間の生活様式を大きく変えた。工場経営者は商売の売り上げが倍になり繁盛して、工場経営者は資本家になった。工場を経営する資本がない人民は、毎日資本家から生活必需品を購入し、自分の収入はすべて資本のもうけになる。だから生活のために、労働力を切り売りして労働者にならざるを得ない。産業はますます発達し資本はますます集中する。資本はますます集中し、貧富の差はますます大きくなる。貧富の差が大きくなった結果、資本家と労働者がお互いに対立する階級社会になる。このような社会では、資本家には資本家の生活様式があり、労働者には労働者の生活様式がある。二種類の生活様式の間には、鮮明なみぞがある。

資本家は無限に経営を拡張するために資本を集中し、それらしい理由を思いつき、自分のやり方が正しいと証明した。こうして、自由に生産し、自由貿易を標榜する資本主義が誕生したのである。

*各種の異なった主義は各種の異なる生産様式を代表している。

労働者に同情する学者たちは、社会がこのように発展していけば、未来は非常に危険だと思った。金銭と財産は少数者の手に集中し、そのほか大多数の生活は一日一日と困窮するだけで、社会進歩による幸福を享受できない。そこで学者たちは時世を憂える考えを強く持つようになった。そしてこのような不合理な搾取制度に反対し、生産手段は労働者のものであるべきだとする社会主義を主張し、資本主義が消滅して、社会主義が実現できるとしたの

である。

労働者がこのような方法を歓迎したのは当然で、連合して組織を成立させ、資本家に給料を増やし待遇を改善するように要求を出した。しかし資本家は承諾せず、双方は闘争をはじめた。ストライキと失業問題は、結局のところ、まるで大風が砂塵を巻き上げて天地が暗くなるほど、社会秩序をはなだしく乱してしまい、まったく秩序を維持できなくなった。

この時、ムツソリーニのような政治家が現れた。かれは一つの和解方法を考え出した。それはつまり、「双方の譲歩」である。まず資本家は利潤を引き下げ、多めに金銭を出して、労働者の生活を改善することで、労働者の生活問題が解決する。そうすれば当然きちんと労働するから、ふたたび騒動を起こして、資本主義を打倒しなくなる。そして資本家と労働者に対して、「われわれの困窮の唯一の原因は人口が多いのに土地が狭いからである。今は協力して国家を強大にするべきで、国外に進出していくつかの肥沃な植民地を奪い取るのだ。そうすれば、すべての問題は解決するだろう」と述べた。労資双方はムツソリーニがいかにも「もつともらしい根拠を示し、もつともらしい論理をくみだてていたので」、その方法を受け入れたのだった。このような方法は、今ではファシズムと呼ばれている。

孫中山先生は、中国は産業が落后した国家で、まだ貧富の差という現象がないので、資本主義になつて混乱の源泉を作り出される必要がないから、社会主義にして無理に財産を共産化することは必要ではないと考えていた。よつて、中国の必要性にもつとも適つた民生主義^①を發明したのである。「平均地権」と「節制資本」の方法を用いて、中国の社会問題を解決しようとしたのである。

*第二「次世界大戦の特性」。

主義とは一国家、一民族が保有する伝統文化の遺産であり、全国民あるいは一部分の国民生活の結晶である。主義は現在あるいは未来の社会生活様式を代表している。今回の世界大戦は民主国家の中英米、ソ連などの反侵略国と、日独伊三カ国の侵略国との戦争であり、すなわち三民主義、資本主義、社会主義が連合した反ファシズムの戦争である。もしもわれわれがこの四種類の主義の特質を正確に把握していなければ、今回の世界戦争を正確には理解できないだろうし、われわれは「文化」が現代の戦争と現代の国防に及ぼす作用を認識するすべがないだろう。

*ある種の政治的な主義を実現しようとすれば、戦争を免れることはできない。

全国民が一致して、ある種の主義を受け入れているような、そのような理想的な国家をこの世界で見つけ出すことは容易ではない。だから、ある種の主義を実現するためには、戦争を免れられない。国内において、あるいは政治力を運用して、反対する者を駆逐するか消滅し、一部分の人が信じている主義を国家の主義にさせるのである。

歴史上、どんな国家でも、国家の主義の形成には、しばらくの間の闘争を経過するものである。たとえ二種類あるいは多種類のたがいに衝突する力が闘争した結果、その一方が勝利し、もう一方が敗北し、表面上、統一の局面を形成したとしても、内部には依然として、多かれ少なかれ矛盾が内蔵されている。このような潜在的な矛盾を克服して、国民全体の意志を一つの意志に溶解させ、国民全体の力量を一つの力に凝集、結合させる。これこそが国防教育の基本任務なのである。

*国防教育の任務は、多数の国防人を造り出し、政治の主義を実現することである。

教育の基礎は、人類の「可塑性（訳注―適応性・順応性）」の上に打ち立てられる。一人の子供がいたとして、その子供の心は一枚の白紙と同じで、どんな色を塗っても、塗った色になる。子供の心はまた水を混ぜてよく練った石膏と同じで、好きな形に彫塑すれば、子供はその形になるのである。このような「可塑性」の存在は、実は人類の

最大の弱点なのである。一国家の政府は、自らの理想に照らして、模型（訳注―モデル）を製作して、全国の教育機関に交付する。一様にその模型に照らして、国民を、政府を擁護し法令に服従する公民に造り替え、さらに強靱で勇敢に、国家を防衛する戦士にするのである。つまり、それが標準的な国防人なのである。全国の学校は国防人を製造する工場なのであり、教師一人一人が国防人を製造する匠なのである。

*生活様式を防衛し、生活様式を変えるための戦争。

だが、政府に反対する者は国民を「反逆」させようとする。そして帝国主義者は弱小民族を奴隷に変えたいと思っている。これは実に危険なことだ。このような不幸な状況が発生することを予防するため、世界各国は教育権を集め、政府の手で制御している。政府が任命、派遣した人員だけが教育を行うことができる。政府の審査に合格した人員だけが教師になれる。政府は国民に「われわれの先祖は、このような生活を送ってきた。われわれもこのような生活を送るのだ。このような生活様式は理想的で、申し分のない生活様式である。われわれはこのような生活様式をわれわれの子孫に伝授しなければならない。われわれの生活様式を変えようともくろむ輩は、われわれの敵である。われわれは決然として敵と奮闘し、敵を消滅すべきである」と告知している。国民は自己の生活様式を守るために戦わなければならない。かりに政府が国民に「われわれはこの世界で最も優秀な民族である。われわれの現在の生活は不合理な生活である。われわれはより大きな生存空間を奪取することで、現状を打破して、申し分のない幸せな日々を過ごせるようになる。永遠にこの世界で繁栄し、発展するのである」と告げたとしよう。そうすれば国民は自己の生活様式を変えるために準備し、戦うに違いない。

侵略者は自己の文化を拡張し、侵略者は敵の文化を消滅するために、敵の生活様式を「主人公」から「奴隷」に変えさせるので、戦争をやらざるをえない。被侵略者は自己の文化を保護しなければならないため、ゆえに侵略者

の文化を拒絶し、自己の生活様式の変更に反対するので、やむをえず戦争をせざるをえない。スターリンは一九四一年七月三日（訳注一六月二日に独ソ戦開戦）、ラジオでソ連の全土に、以下のように呼びかけた。

敵（訳注一ナチス・ドイツ）はとても残酷で横暴である。敵の目的はわれわれの血と汗がしみ通った土地を占拠し、われわれが自己の労働で獲得した食糧と石油を奪い取るうとしている。敵の目的は、地主の政権を回復して、ツァーリズムを復活させることなのだ。つまりロシア人の、ウクライナ人の、ベラルーシ人の、リトアニア人の、ラトビア人の、エストニア人の、ウズベク人の、タタール人の、モルダビア人の、グルジア人の、アルメニア人の、アゼルバイジャン人の、ソ連のその他の各民族の自由な人民の文化と国家の生存を破壊しようとしている。ソ連の各民族をゲルマン化させ、ゲルマン民族の公爵貴族の奴隷にしようとしている。

シンガポールが陥落してから、イギリス首相のチャーチルは、今年（一九四二年）二月一五日に演説し、全世界に向けて戦局を述べた。その中に下記の内容がある。「わが英語国家は自由主義の政治制度の福利を享受できる。すでに言論の自由が保障された議会と新聞を保有している。われわれの習慣化した生活様式は、かくのごときものである。そしてわれわれが奮戦して維持し擁護したいのもこのような生活様式なのである」と。

*独立して自由な国家民族は、独立して自由な文化を必ず持っている。

一民族には一民族の文化があり、一国家には一国家の生活様式があることがわかる。かりに民族の文化が敵に消滅させられ、生活様式が敵に改変されたら、国家と民族が運良く一時的に生き残ったとしても、従属して奴隷となつたにすぎず、もう独立と自由な資格は失われてしまっている。国防教育は一種の手段であり、民族の文化を防衛す

ることが真の目的である。中国人は中国の教育を受け、中国式の生活をし、中華民族の文化を代表して、中華民族の文化伝統を継承すべきである。教育を受けたことがない人の頭の中は空瓶のようである。教育を普及し、文盲を一掃することが、民族の文化を代表する色になり、それが空っぽの頭の中に注入される。国民が教育を受ける程度が深まれば深まるほど、頭の中に装置してある色が多ければ多いほど、生活に現れる民族の文化の色彩はますます濃厚になる。もしも一人の中国人が頭の中に日本の文化を詰め込んだら、話す言葉は日本語、書く文字も日本語、着るのは和服で、信仰するのは武士道で、崇拜するのは天皇になつてしまふだろう。このような人間が祖国を防衛するために、われわれを侵略する日本帝国主義と命がけて戦うだろうか。もちろん無理だ。というのは、その中国人は完全に日本に同化しているからなのだ。

*国防文化の効用とは、国民の頭脳を武装することである。

ここから、文化についてのみ、教育についてのみ講じるのではだめだと言える。国防文化と国防教育を講じてこそうまくいくのである。国防文化の最大の効用とは、教育の力で国民の頭脳を武装し、強靱な精神の堡壘を築きあげ、異民族の同化に抵抗することである。

*民族文化の衝突は、現在の戦争の重要な要因である。

*ゲーリングは、チェコ人には文化がないと述べた。

現代世界の戦争は、種族と文化の衝突が重要な要因の一つである。独立した文化を持たない民族は、本来的に地球上に生存し発展することができない。周知のように、チェコスロバキアという国家は、戦わずして滅亡した。チェコスロバキアの陸軍は世界的に有名で、ドイツ軍と比較しても優劣をつけられないほど強大だった。ではなぜ、一発の銃弾も発射せずに屈服してしまつたのだろうか。その原因は、チェコスロバキアには、統一され独立した文化

がなかったからである。

チェコスロバキア境内のズデーテン (Sudeten) 地方の大部分の居住者はドイツ人であり、ドイツ民族の伝統的な文化を保持していたので、当然チェコ人の統治を甘んじて受け入れることはなかった。ズデーテン問題が発生した時、チェコスロバキアの大統領のベネシュ^④は「わたしは道徳の力を強く信じている。善意と相互の信頼で、すべての問題を解決することができる」と述べた。

一方、ゲーリングは、チェコスロバキア人を「一文の価値すらない」とのしつてこう言った。「ヨーロッパの一部分は道義が不足しており、現在では何ということか、人類をもてあそんでいる。哀れな侏儒民族には少しも文化がなかった。チェコスロバキア人の先祖が誰なのか誰にもわからない。現在はかえって文化を有するドイツ民族を圧迫しようとしている。その背後にはモスクワとユダヤの悪魔が隠れており、チェコスロバキアという仮面をつけて良からぬことをしているのだ」と。

ポーランドという国家は、ドイツと二七日間戦闘して滅亡した。二千二百万の人口を擁する国家の戦闘力がこのように弱かったのは、あまりに惜しい。

しかし、アメリカのある記者シャイラー (Shiela)^⑤とポーランドの内情に詳しい人物とが会談した記録を見ると、ポーランドの運命はとくに決まっていたことがわかる。シャイラーは「その人は、ポーランド文化の立ち後れた状況を描写しているが、それは非常に驚くべきである。かれはポーランドの農村に行つたことがある。かれの話によると、ポーランドで新聞が読めるのは全部でわずか二百万人しかない。ある町にはラジオが一台もない」と日記に綴っている。

*文化がないか、文化が立ち遅れた民族はどちらも存在できない。

このことからすれば、独立も、統一もしていない文化しか持たない国家は、もともと存在できない。文化が立ち遅れた国は、文化が進歩した国の攻撃にあうと、なお滅亡を免れない。国防教育の任務は、ただ消極的に固有の民族文化を保存するだけでは不十分ではなく、さらに積極的に固有の文化の発揚に取り組む必要がある。旧文化の中から新文化が生まれてこそ、異民族の文化侵略に抵抗できるのである。

二、教育組織と文化組織

*文化の防衛線。

世界各国は、文化と国家民族との生存の関係をはつきりと認識してから、次々と文化の国防線を組織しはじめた。今日、文化は国防の第一線であり、文化戦は総力戦の最前線である。

教育の範囲は、過去のように狭小ではなく、文字が読めてこそ教育を受けられるのであり、学校があれば本が読めるようになるわけではない。社会の進歩は教育を社会化させたのである。事実上、生命の過程が教育の過程であり、生活の範囲が教育の範囲なのである。家庭教育、社会教育と学校教育は同じように重要である。家庭、学校、社会は文化国防線の三つの堅固な堡壘である。つまり、国防精神を陶冶し、民族の文化を創造する鍛錬の場なのだと行うことができる。

*組織と体系がある教育が時代の要求に合致する教育である。

現代の戦争は「総力戦化」しているため、国民一人一人が全員、正式もしくは非正式な戦闘員になる。国民の教育と訓練は、特に各国政府の注意を引き起こし重視もされている。学校教育と社会教育の機関は政府によって厳密

に組織され、系統的に管理される。幼稚園から、小学校、中学校、大学、首都から都市まで、都市から郷里まで、教育組織を離脱できる人は一人もいないし、政府が限定的に許可した範囲内で呼吸し、民族文化の空気に浸る人は一人もいない。文化は教育組織機構を通じて、国民全員の頭の中にまで到達するのである。それはあたかも、河の水が水道管を通って、一戸一戸まで到達するのと同じなのである。

*文化消毒。

政府の検査を通過していない「文化」要素は、国防の観点から見ると、濾過されていない天然水と同じで、病原菌と毒素を含んでいる。各国の政府が厳格に実施する「文化工作」の第一歩は「消毒」である。今ここでわたしはソ連のアレクサンドロフの著作『ファシズムは人類の無慈悲な敵』の一段を引用して、ヒトラーが政治の表舞台上に登場した後、どのように組織して、どのように計画的にドイツ文化の消毒をしたのかを説明してみよう。

かれらはまず各大学の図書館と公共図書館の書物を焼却した。ちょうど中世の時期に、スペインの宗教裁判長^⑦だったトマス・ド・トルケマ^⑧ダは全国を捜査して持ち帰った書物と草稿を、大衆の面前で焼却したのと同じことである。今日の宗教裁判官、すなわちファシストの野獣も数百の奇形な大衆の狂気の中で、二千万冊以上の書籍を焼却した。ベルリンでは「五〇万キログラム」の科学に関する書籍と古典文芸の書籍を焼却するの^⑨に、まずこれらの書籍を警察署の馬屋に放棄しておく、それからベルリンの広場で焼却したのだ^⑩。ゴ^⑪ーリキー、バルビユス、ハリール・ジブラ^⑫ーン、ユーゴ^⑬ー、ロマン・ロラン、ルートヴィヒレン^⑭及び他の文学者と学者の著作を焼き捨てたのだが、それは始まりにすぎなかった。これら獣心を持ったファシストの一味は、科学と先進的な文芸に怯えたため、ヒトラーが述べた『知識界は民族の役立たず』という言葉を根拠にして、数

十人の学者と文学者を残虐非道にも殺害した。アインシュタイン^⑮、トーマス・マン^⑯、セオドア・フォン・カルマン^⑰及びもつとも優秀な作曲家、音楽家、演出家と画家を国外に追放してしまったのである。

もともとヒトラー指導下の官吏たちの眼から見れば、ナチ党の官吏が焼却した書籍の内容には、健全なナチス文化を破壊する病原菌を含んでいた。ナチ党の官吏が虐殺したり追放したりした文人学者はすべてファシズムに反対する叛徒であり、少しの同情の余地もなかった。

ただドイツ人のみが、正確にドイツを認識した。アメリカ国籍を取得したドイツ人波希孚爾^⑱は、「ある事情により、ドイツ人がそうすべきと思ひさえすれば、ドイツ国家もしくは国家社会主義ドイツ労働者党に有利でありさえすれば、それは正しいし、道徳的だし、正当であると認識している。ここからすれば、ドイツ人は倫理、光榮、正当な行為といった抽象観念を持たないのだ」と述べている。

ヒトラーの共産主義を恨むことは痛切で、それはまさにスターリンのファシズムを呪うことと同じくらいだった。ドイツがラインラントに進軍したまさにその日（訳注―一九三六年三月七日）、ヒトラーは国会で以下のように演説をした。^⑲

わたしは残忍で不義な共産主義の独裁がドイツ人の身に及ぶのを決して許さない。このような消極的なアジア式の世界観は、どんなものでも否定する。わたしはもしもこのような壊滅性のアジア式人生観、あのようなボルシェビキ革命の混乱が万が一欧州で成功すれば、結果は恐怖でしかないだろう。

またあるとき、ヒトラーはある「文化会」で述べている、

頭の中身のない侏儒がいなくなつてこそ、ドイツは欧州の赤化の潮流を阻止する防波堤になる。われわれがいなければ、欧州と欧州の文明は、とつくに共產主義の荒波に耽溺しているだろう。

ソ連とドイツ両者の言論を対照して読んでみると、両国の文化の防衛線は本当に軍營の守備が嚴重で殺気がみなぎつていて侵しがたかつた。戦争が勃発する前から、ファシズムはとつくに共產主義と相互に闘つていた。

*比較的進歩している国家では、文化力はつねに全面的に動員され、戦闘の任務を負う。

文化闘争の戦線においては、哲学、倫理学、宗教、科学、文学、芸術、音楽であれ、すべてが武装して、戦闘序列に加入して、自分の持ち場に立つて敵を警戒し監視して攻撃した。われわれが比較的進歩している国家に入ると、すぐにある感覚があり、山水、草木、人物には別の特色を感じる。この「特色」とは、その国家で独特な文化が散発されるいぶきである。われわれには色彩がない書籍、雑誌、映画、図書は見えない。色彩のない演説、談話、詩歌、音楽は聴こえない。声、色、稲妻、光はわれわれの感覚器官をしっかりと包圍し、われわれにそれらの国家民族の本当の姿を出させない。もしもわれわれが注意しなかつたら、五里霧中に落ち込んでしまい、この国家民族の文化の雰圍氣に陶醉し、しだいにその文化に同化されることになろう。

*理論闘争は文化戦の焦点、武力戦の前線である。

それぞれの民族、それぞれの国家、それぞれの党派にはみな、自己の哲学があり、自己の理論がある。文化組織の中で、理論は指導する地位にある。哲学と理論には党派性がある。資本主義には資本主義の哲学があり、社会主

義には社会主義の哲学があり、ファシズムにはファシズムの哲学があり、われわれの三民主義には三民主義の哲学がある。哲学は文化組織の基礎で、すべての理論の出発点である。もし出発点を間違えたら、理論には良いところが一つもないし、理論が正しくなければ、行動も一緒に間違つてしまうだろう。

ここから、理論闘争は文化闘争の焦点になり、国家民族あるいは党派による戦争の前哨である。たとえば、ヒトラーの主義の侵略性は、「優秀な民族は下等な民族を統治しなければならない」という観点から生まれたものである。ヒトラーは『わが闘争』^④で以下のように述べている。

単一民族ではない国家が、もし全力で国家の中にもっとも優秀な民族を培養できるとすれば、きつとある日に世界の主人になれるだろう。われわれが想像できるのは、将来のある日、人類はさまざまな問題に遭遇するだろうということである。そして、この問題に対処する責任は、「超民族」がいてこそ、担うことができる。だから、「超民族」はかならずや全地球の資源と富を支配できるのである。

平和主義、人道主義の思想というのは、ただ一つの優秀な民族がすでにすべてを征服している世界で通じることができない。ゆえに、われわれはまずは戦闘すべきであり、それから、再びその他を考えていくべきなのである。

*ヒトラーの侵略哲学は侵略的な戦争を引き起こした。

ヒトラーの「超民族」がすべてを征服するべきであるという侵略哲学を根拠として、ドイツの『軍事週刊』には、この哲学に相応する戦争理論が出た。それは「いかなる個人であれ、社会的活動であれ、戦争の準備を助けるべき

であり、そうしてこそはじめて活動の許可をあたえることができる。新しい人類はただ「戦争」という一つの考えを持つべきである。戦争はすべきでないという、別のわけを思いつかない」という理論である。

同時に、侵略的な教育宗旨も一緒に現れた。フランクフルト大学の学長は、「われわれの大学教育の任務は、客観的な科学を教授することではなく、兵士の科学を教授することなのだ」と述べている。

ここから、ドイツのファシズムの侵略戦争は、ヒトラー主義を出発点として、まず文化組織を造り、さらに軍事組織を建設して、一つのシステム、一つの計画、一つの指導の下で進めていたことがわかる。

スターリンはゲルマン人が「超民族」であることを決して認めないし、ゲルマン人が世界を支配するべきだということはもつと認めない。そしてスターリンは以下のように述べている。

一部の人は「上等な人種」、たとえばゲルマン人のような人種が戦争を組織して、「下等な人種」に反対すべきだと思っている。そのために、まず、スラブ人に反対すべきだと思っているのだ。かれらはこのような戦争だけが現状から脱出する道を与えてくれると思っている。「上等な人種」は「下等な人種」を育成し、「下等な人種」を統治する使命があるからである。かりに言えば、このことと科学とは天地ほど隔たりがある奇妙な理論が果たして現実になるといえるのだろうか。ここからどのような結果が得られるのだろうか。古代ローマ帝国が現在のドイツ人とフランス人の祖先だとすると、現在の「上等な人種」の代表たちとスラブ人が同じだと知っている。古代ローマ帝国ではドイツ人とフランス人を軽蔑しており、かれらは「下等な人種」、「野蛮人」と言われており、「上等な人種」、すなわち「大ローマ帝国」に永遠に屈服すべきだと考えていた。そのうえ、われわれ相互間で自由に話ができるが、古代ローマ帝国が当時そのようにしたのには理由がある。現在の「上

等な人種」の代表たちはそうはできないのである。

*ソ連は反ヒトラー主義から反ヒトラー戦争に進展した。

ソ連の政治指導者はゲルマン人が優越民族でありスラブ人が劣等民族なので、ゲルマン人がスラブ人と世界中のその他の民族を統治すべきであると認めなかったから、ソ連の文化力を動員して隊列を組織し各種の刊行物、映画、ラジオ放送で、たえずドイツのファシズムが行っている悪行を暴露し、ヒトラーの罪悪を宣伝し、ソ連人民の反ドイツの感情を燃えたため、ソ連人民に心理的にナチスの軍隊を随時迎撃する準備を整えさせたのである。

こうした備えがあつたので、一九四一年ドイツ軍が破竹の勢いで進攻してモスクワを包囲し、ソ連の広大な土地を占領したのだけでも、ナチス政権はソ連の被占領区域に親ドイツ政権を樹立しようとしなかった。このことはソ連人民がゲルマン民族の文化を受容し、自己の生活様式を改変することを願わなかったことを証明している。戦争の初期、ソ連は軍事的に大いに損失を出したが、ソ連人民は前線、後方および敵の背後で「堅定性（粘り強さ）」を発揮し、ソ連人民の政治訓練と文化組織が成功したことを充分証明したのである。政治訓練と文化組織の成功は、反ファシズム戦争の最終的な勝利を保証したのである。

現代の戦争は全国民が参加する総力戦であり、「敵が降参しなければ、殲滅する」のである。このような方法は武装した兵士に適用できても、身に寸鉄も帯びない不屈の精神を持つ敵国人民には適用しなかった。「大衆の軍隊」が戦場に出現してからは、一般国民に長期的な政治の安定性をもたらすことの必要性がますます高まった。大量の敵の殲滅、広大な領土の占領は決定的な勝利とは言えない。本当の勝利とは、敵の戦意の消滅である。そして自らを「下等な人種」であると認め、甘んじて「上等な人種」の統治を願うことなのである。

三、現代戦争における文化組織の新しい任務

戦争は武力で勝利をえるものだが、文化力で勝利をえることもできる。勝利を勝ち取るのは武力だが、永久的に勝利を保つには文化力を用いなければならない。文化力は有形の勝利を無形の勝利に変更できるし、暫定的な勝利を永久の勝利に変更することもできる。

*文化が立ち遅れた民族も勝利を得ることができ、勝利を保持することはできない。

文化的に優越した民族が、強大な民族だとは限らない。文化が立ち遅れた民族も文化的に優越した民族に消滅させられるとは限らない。中国は文化的に優越した民族であるが、歴史上たびたび文化が立ち遅れた野蛮な民族に征服された。漢民族は自己の文化力を頼りにして、野蛮な民族の奴隷となりながらその師となることによつて、ゆつくりと征服民族の生活様式を改変した。機会をうかがい、征服民族を追い払つて本来の統治権を回復したのである。そして奴隷の帽子を脱ぎ捨てて、ふたたび主人公になった。

この事實は、文化が立ち遅れた民族は勝利を得ることができけれども、勝利を保持することができないことを証明している。ドイツのゲルマン民族とフランスのラテン民族とは、文化水準はほぼ同じで、武力も互いに優越がない。ゆえにフリードリヒ二世はフランスを蹂躪し、ナポレオン一世もプロシアに大敗北した。ウイルヘルム一世は一八七〇年にフランスのパリを攻め落とした。一九一四年から一八年の第一世界大戦でフランスが協商国と連合してドイツを打倒してから、まだ二〇年しかたつていないのに、ドイツ軍はまたしてもパリに進撃してきた。両国はしばしば、武力闘争だけをくり返したが、どちらも一方を消滅させることはできなかった。今回、もしもドイツの方法が文化面で工夫しようと思わないまま、フランス人を甘んじて、風下に立たせ、「優越人種」ゲルマン人の統

治を進んで受け入れさせたのだとしたら、機会があればすぐに、フランス人は解放を求めて立ち上がるだろうとするだろう。

*ガンジーの非暴力不服従主義はインド民族固有の文化を保存した。

再度見てみよう。イギリス人は武力でインドを征服したが、インドは古くからの文明国で、磨滅しない民族文化があったので、イギリス人は精神文明の上ではインドをどうすることもできなかった。そこでモーターの力と機械の力でインドを消滅しようとしたのである。

イギリスはさらに「非暴力不服従主義」^⑤を唱える革命家―マハトマ・ガンジーにも遭遇した。なんとガンジーは手紡ぎ車（訳注―チャルカーという）^⑥で資本主義の機械工業に抵抗し、民族経済の生命をひきとめ、つなぎとめたのである。ガンジーはイギリス軍の機関銃と大砲には抵抗できないが、経済的搾取には抵抗しなければならないことをよく理解していたのである。また、ガンジーは生産様式が生活様式を決定し、インドの民族工業はイギリスについていけない以上、民族の生活様式は当然生産様式から離れて単独で前進することはできないことを知っていた。

そこでガンジーはこの肝心な点を把握するために、自分で生産して自分で消費するという原則を定め、外国の製品に代えて国産品を使用し、民族経済が破産する災難から救った（訳注―国産品愛用運動、スワデーシのこと）。このような「非暴力不服従主義」は「生活様式の資本主義化を拒絶する」主義である。インド人はこの武器で、インド民族の固有の文化を保存したのである。インドの文化が一日でも独立し、存在すれば、インド民族はいつでも独立を回復する可能性があった。だからこそ今日のインドは、名滅びて実存するのだと言える。インドの潜在力は無視できない。

*日本の奴隸化教育は朝鮮人の文化を消滅させた。

朝鮮は日本帝国の統治下で、時間的にはイギリス人のインド統治の長さにはおよばないものの、朝鮮人には「非暴力不服従主義」を提唱したガンジーは存在しなかったので、朝鮮経済は早々に破産してしまい、文化も日本の「奴隸化」教育制度に消滅させられた。この状況下で、朝鮮の革命の志士たちは国家の独立を回復するために一切を犠牲にするのを惜しまずに奮闘したのだが、大国の支援がなかったから、このような復国運動は、短時間で成功をおさめることができなかった。

*武力で勝利を獲得できない国家は、文化力で征服できる。

以上の事実から、文化は戦争において、とりわけ現代の戦争において、特別に重要な位置を占めると説明できるだろう。武力で勝利を得ることができない国家は、文化力で征服することができる。孟子は言っている。「力を以つて人を服する者は、心服にあらざるなり。力贍らざればなり。徳を以つて人を服する者は、中心悦びて誠に服するなり（力づくで人を帰服させるのは、服する方から言えば、それは心から服しているのではなく、力がたりないために、やむなく一時服従しているに過ぎぬのである）^⑦。兵法の上でも「心を攻むるを上と為す（心理面を攻めるのが上策である）」^⑧と言っているように、用兵はやむを得ない事情だと考えられていた。

現在世界の列強はすべて、ある種の主義を標榜しているが、それは主義の力で国家民族の生存独立を防衛しようとし、主義の力で弱小民族を征服しようとするのが目的なのである。本来、以前は、戦争は単純な武力戦だった。軍隊を前線に展開してお互いに斬り殺し合いをさせればよかったから、具体的な主義で戦争指導をすることはなかった。

現代の戦争では、実際の軍隊が動員される以前に、すべての敵対する国家は文化の軍隊を組織しはじめ、「心を攻める」戦闘を進める。正式に戦争がはじまると、文化組織は軍事組織と共同して戦闘の意気込みを高めて、必勝の

信念を確固たるものにする責務を担っている。戦争が終結すると、勝利を取めた側は、継続して文化力を利用し戦果を拡張し、敵国の人民の戦意を消失させて、「力で屈服させる」状態から「心を屈服させる」状態にしなければならなくなつた。

敗戦した側も、士気を鍛えて人心を奮い起こし、怠ることなく備えて、報復して恥を雪ぐ必要があつた。そのために教育組織と文化力を利用してまずは国民の頭脳の武装に着手しなくてはならなかつた。ゆえに、軍事的な戦争は短期間で、一時的であるが、文化の戦闘は長期的、永久的になつた。過去の文化組織の最大の効用は、人民の生活を増進することだったが、現在の文化組織の最大の効用というのは、戦闘力を強化することなのである。

一民族の文化が、他民族を同化する力を喪失したら、国民文化上の警戒面を高め、その他の国家民族の文化力からの同化を嚴重に防がなければならない。文化組織は消極面から見ると、防衛力を充実しなければならない。積極面から見ると、攻撃の精神を發揮すべきである。防御と攻撃は物質の両面だから、字面は違つても、本質は一個、つまり文化の戦闘性なのである。

*文化にも戦闘性と排他性がある。

文化は人類の社会生活の産物である。社会生活の様式が異なる国家や民族とは、異なる文化が生まれるのは当然前である。資本主義国家には資本主義文化が、社会主義国家には社会主義文化が、ファシズム国家にはファシズム文化が、三民主義国家には三民主義文化がある。主義を異にする二つの国家は、政治制度、経済制度、宗教、気風、人民の生活習慣、道徳觀念、すべてが顯著に異なり、これらの相異から矛盾が發生し、矛盾から闘争が生まれる。

たとえば、資本主義国家とファシズム国家の内部には資本家と労働者の階級対立があり、社会主義国家が階級闘

争を提唱しプロレタリア独裁の文化を主張することに対しては、ひどく嫌悪して憎しみを抱くのである。ソ連のよ
うな社会主義の国家と、英米のような資本主義国家はともに広大な領土、豊富な資源を保有していて、現在の状況
に満足し、平和を保ちたいと考えていて、生産と建設に従事している。だから世界の領土を再分割する要求、戦争
という手段で現状を打破するファシズム国家の侵略政策の要求とは、火と水のように相容れないのである。

ソ連は社会主義を実行する国家で、ソ連の領域は社会主義文化が成長、発展する領域である。英米は資本主義を
実行する国家で、英米の領域は資本主義の文化が成長、発展する領域である。ドイツはファシズムを実行する国家
で、ドイツの領域はファシズムの文化が成長、発展する領域である。中国は三民主義を実行する国家であり、中国
の領域は三民主義文化が成長、発展する領域なのである。社会主義文化の領域に、資本主義文化が混入することは
許されない。それは資本主義の文化領域に、ファシズムの文化が混入することを許さないのと同じである。軍隊に
は戦闘性があり、主義には戦闘性があり、文化にも戦闘性があるからである。戦闘性があるから、排他性もある。
国防組織の要素の一つとなる文化組織には戦闘性があるから、国防文化にも排他性があるのである。

*国防国家の文化組織は統一する必要がある。

近代化した「国防国家」には、道理に従えば、二種類の異なる文化を代表する主義が同時に存在すべきではない。
もし二種類の主義が同時に存在すれば、この二種類の主義が各自の排他性を発揮して、闘争が発生するだろう。三
民主義の信徒は国民の思想を青く染めあげ、共産主義の信徒は国民の思想を赤く染めあげ、資本主義の信徒は国民
の思想を白く染めあげ、ファシズムの信徒は国民の思想を黒く染めあげるとしよう。もしも一つの国家の中にたく
さんの主義が同時に存在したら、国民の意志はどうやって統一できるのか。国家の力量はどうやって集中させるの
だろうか。

イタリアはファシスト党があるだけなので、イタリアの国民が受ける教育は混じりけのない完全なファシスト党の教育である。ドイツは国家社会主義労働者党があるだけだから、ドイツの国民が受ける教育は完全に混じりけのない国家社会主義労働党の教育である。ソ連は共産党しかないので、ソ連の国民が受ける教育は混じりけのない純粹な共産党の教育である。イタリア、ドイツ、ソ連、これら三方国の国民全体は、受ける教育が同じだから、思想上、信仰上、彼らが追い求める生活様式で、一致する。もしも動揺分子と反動的な思想が出現したら、政府は厳格な手段を使用して、それらを一掃し、消滅させるだろう。文化組織はすべて統一的であり、整然とした歩調で国防組織の行列の中で前に向かって邁進している。だから、戦闘の力は特別に強大なのである。だが、アメリカの政党は二つある。民主党と共和党である。イギリスの政党は三つもある。保守党、自由党と労働党である。

各党は群衆の一部を支持者にしている。各党には各党の主義と政策がある。党派の利害と国家の利害とが異なるので、いったん戦争になれば、各党、各派の意見を一致させるのは容易ではない。国家の利益と政党の利益とが、両方とも完全に一致できないとき、結局は政党の利益を犠牲にして、国家の利益と折り合いをつけるのか、国家の利益を犠牲にし、政党の利益に合わせるのか、はつきりとは言い切れないのである。いつも国家の大事になるたびに、全国の新聞には議論が百出して意見がまちまちで、一致した結論に達することができない。この点から見れば、多党政治の国家は、民衆の意志は分散傾向にあり、民衆の文化組織はソ連とドイツなど一党政治の国家のような厳密性とは比べ物にならないほど脆弱である。国防上現される力もソ連、ドイツにははるかに及ばないのである。

われわれは、文化も戦争の勝敗を決定する重要な要素の一つであることを否認できない。たとえ交戦する二カ国が人力、物力、生産技術、その他の戦闘条件が完全に相等しいとすると、一方の国の文化組織が厳密で、軍事化の

程度が高いなら、必ず勝利を獲得できるだろう。

*文化力の効用は武力に比べて時間の方が大きい。

人類は終始戦争の組織者であり、勝敗の決定者である。優越した文化力で敵国を瓦解させる可能性があるが、同じように文化組織で優勢を占める国家に粉砕される可能性もある。われわれは、資本主義国家は本質的に反ソ連的で、ファシズム国家も本質的にソ連に反対していることを知っている。そして、資本主義国家とファシズム国家は軍事力でソ連に勝利して共産主義を消滅しようとし、ソ連は「階級闘争」を宣伝する方法で、世界革命を完成させようとしていることも知っている。ドイツの将軍は、「五〇万冊の小冊子（パンフレット）は百トンの爆弾よりも効果的である」と言ったことがある。資本主義国家は、ファシズム国家の軍隊の進攻に抵抗する一方、と同時に戦争の結果、戦後に「十月」革命の勃発があるのではないかと憂慮している。

このように、組織をいかに運用するのかわという方法は、民族、国家の文化に「血の浄化」「消毒」といった工作をすることになり、その工作に国防力がふんだんに発揮されて、消極面と積極面で二重の任務を完成する。このことは現代国防学上、最新かつまた重要な命題なのである。

〔附記〕末尾になったが、本稿の作成にあたり、本号編輯委員会から詳細な査読結果を頂くことができ、原稿の修正におおいに参考になった。この場を借りて深く感謝したい。

注

- ① 孫文の唱えた三民主義を構成する一つ。経済的不平等の是正を目的として、社会的平等を説くもの。三民主義は中国同盟会の機

関誌『民報』で孫文自身が体系的な革命理論として紹介した。

② 反ファシズムとは一般的にいえば、ファシズムに対して批判ないし反対の立場をとることである。しかし、ファシズムに反対するといつても、そこにはさまざまな動機がみられ、反対の意思の表明の仕方、行動のとり方は多様である。精神的態度としての反ファシズムもあれば政治的立場としての反ファシズムもあり、反対行動においても非組織的なものから組織的な運動まで、いろいろな形態が生じる。

③ この日はシンガポールが日本軍に降伏した日だった。一九四二年二月十五日の日曜日が降伏の日となった。軍用食糧の残りは二、三日分しかなく、弾薬も極度に乏しくなり、車輛用のガソリンは事実上皆無であった。特に最悪なことは、水の供給はあと二十四時間分しかなかった。反撃か服従かの二者択一のうち、前者は消耗し果てた部隊の能力を越えているという報告を、先任指揮官たちがパーシヴァル將軍に伝えた。彼は降伏を決意した。日本軍は無条件降伏を要求し、それは受け入れられた。敵対行為は午後八時三十分を終了した」(W・S・チャーチル／佐藤亮一訳『第二次世界大戦』三河出書房新社・昭和五十九年、一一二頁)。

④ 一八八四―一九四八年。チェコスロバキアの政治家。第一次世界大戦中はマサリクに協力して独立運動を推進。独立後外相となり、小協商を実現。一九三五年大統領となる。一九三八年ミュンヘン協定の成立でイギリスに亡命。第二次世界大戦中は亡命政府の首脳。戦後一九四六年、再度大統領となり東西陣営の仲介を策したが、一九四八年の革命で失脚し、共産党政権が成立した。

⑤ ウィリアム・L・シャイラー(一九〇四―一九九三年)。アメリカ合衆国のジャーナリスト、戦争特派員、歴史家。ナチス・ドイツのコー大学を卒業後、ヨーロッパに渡り、シカゴ・トリビューン、及び国際通信社の外国特派員を経て、エドワード・R・マローが作った、CBSラジオジャーナリストチームの最初の記者となった。

⑥ ゲオルギー・フォードロヴィチ・アレクサンドロフ(一九〇八―一九六一年)。サンクトペテルブルクの労働者の家庭に生まれた。一九三二年にモスクワ歴史哲学研究所を卒業し、研究所に残り研究を続けた。一九三八年、コミンテルン執行委員会出版局副局長、一九三九年にはソ連共産党中央委員会煽動局副局長、モスクワの中央委員会高級党学校校長に任命された。一九四〇年に、煽動局局長、一九四六年にソ連科学アカデミー会員に選出された。一九四七年に失脚して煽動局長の地位を失うが、組織局員には

残留した。一九五四年、マレンコフにより文化相に任命されるが、一九五五年にフルシチョフにより解任された。一九六一年に、モスクワで死去した。

⑦ 宗教裁判は異端尋問のこと。異端絶滅のため司教の通常の法廷とは別に、十世紀頃から常置された西方キリスト教会の裁判制度。密告、拷問、自白の採用などの方法がとられ、容疑者に不利であった。裁判は残酷、悲惨になりがちであったため、教会の大汚点になった。

⑧ 一四二〇—一四九八年。スペインのドミニコ会士。スペイン最初の異端大審問官に任命され、スペイン全域にわたって異端審問を改組し、厳酷に改訂、異端以外の犯罪にも拡張し、当時の慣行にしたがって拷問を加え、少なくとも二千人以上を焚殺した。審問方法は『異端審問教程』として刊行され後世の審問の手引書となった。

⑨ ナチス・ドイツ時代には思想的にナチズムに合致しないとされた書物が、大衆の目前で大量に償却された。行動を主導したのはドイツ学生会だった。親ナチス以外の学生組織、ナシヨナリスト右翼の学生組織も参加した。

一九三三年五月一〇日の夜、学生たちはドイツ全土の都市で「非ドイツ的魂への抵抗」の行進をした。ベルリンでは、四万人以上がオペラ広場（オーペルンプラッツ）に集まり、詩人・哲学者・作家・学者の手になる二万冊の書物が焼却された。ゲッペルスは、「ここに二月革命の知的基盤は地に落ちた」と宣言した（イアン・カーショー／川喜多敦子訳／石田勇治監修『ヒトラー一八八九—一九三六』上白水社・二〇一六年、五〇二頁）。

⑩ 一八六八—一九三六年。ロシア・ソ連邦の小説家、劇作家、社会活動家。ニジニ・ノブゴロドに家具職人の子として生まれた。四歳で父を失い、祖父の家に身を寄せるが、まもなく一家は離散し、十二歳のときの靴屋の小僧を皮切りに、請負師の徒弟、汽船の皿洗い、聖像画房の小使、パン職人、守衛、弁護士と職を変えながら国内を放浪。革命運動に参加し、社会主義リアリズムを創始、プロレタリア文学に大きく貢献した。小説『母』、戯曲『どん底』がある。

⑪ 一八七五—一九三五年。フランスの小説家。人間の醜悪さを描いた自然主義小説『地獄』で有名になり、ゾラの継承者をもって自認。ついで『砲火』で戦争の悲惨・恐怖を活写し、『クラルテ』では階級意識を明確に打ち出した。平和主義の国際的文化運動「クラルテ運動」を起こした。一九三三年共産党入党。反ファシズム運動に献身しモスクワで客死した。

- ⑫ 一八八三—一九三二年。アラブの文学者、画家。アラビア語、フランス語、英語を通じての教養を兼ね備えた。短編集に『反逆する魂ども』と『草原の花嫁たち』があり、どちらもアラビア語版と英語版とがある。作風は哲学的で詩情に富み、アラブ近代文学への貢献が大きい。
- ⑬ 一八〇二—一八八五年。フランスの詩人、小説家、劇作家。ロマン主義文学の指導者。父はナポレオン軍の将軍で、母は王党派の家の娘。プザンソンに生まれたが、教育はおもにパリで受け、少年時代から王党派の詩人として頭角を現した。一八二七年には、戯曲『クロムウエル』に付した有名な序文の中で古典主義の演劇を批判し、ロマン主義の文学運動に理論的な支柱を与えた。さらに三〇年には、ロマン派戯曲の典型である『エルナニ』を上演し、その後ロマン派が10年以上の間文壇で栄える契機をつくつた。小説『ノートルダム・ド・パリ』『レ・ミゼラブル』。
- ⑭ 一八六六—一九四四年。フランスの作家。パリ大学教授。ブルゴーニュ地方クラムシー生まれ。高等師範学校で歴史学を専攻。一八九五年文学博士号を取得。母校、パリ大学で教える。『狼』『ダントン』などの史劇作品で文壇にデビュー。人道主義的ヒロイズム観にたち『ペートーベン』などの伝記を著す。大河小説『ジャン・クリストフ』は最高傑作で、アカデミー文学大賞、ノーベル文学賞も受賞。三十年代は反ファシズムの立場から、ソビエト社会主義へ傾斜を深めた。
- ⑮ 一八九九—一九七九年。ドイツの作家。ドイツ文化科学研究所所長、ドイツ文化科学研究所教授。ドレスデン生まれ。一九二八年ドイツ共産党入党、プロレタリア革命作家同盟書記長を務め、投獄される。三五年スイスに亡命、スペイン内乱に従軍する。三七年メキシコ亡命、四七年帰国。その後文化科学研究所所長および人類学教授を務める。第一次大戦の体験を即物的に書いた『戦争』、『スペイン戦争』、『戦闘なき戦い』などの作品がある。
- ⑯ 一八七九—一九五五年。理論物理学者。ユダヤ系ドイツ人。光量子説・ブラウン運動・特殊相対性理論・一般相対性理論を発表。一九二一年、ノーベル物理学賞受賞。一九三三年にナチスに追われて渡米。マンハッタン計画に参画したが、第二次世界大戦後は世界政府を提唱するなど、平和運動に尽力した。
- ⑰ 一八七五—一九五五年。ドイツの小説家・評論家。ミュンヘン大学で美術史、文学史などを聴講。一九三三年亡命、三八年アメリカに逃れた。第二次世界大戦後はスイスに定住。ショーペンハウアー、ニーチエ、ワグナーらの影響を受け、完成された文

と神話への志向、パロディーの駆使などにより、二〇世紀の最も重要な作家の一人に数えられる。最初の小説『ブッデンブローック家の人々』、短編『トニー・オ・クレイゲル』『ベニスに死す』、『魔の山』『ファウスト博士』など。二九年ノーベル文学賞受賞。

⑱ 一八八一—一九六三年。空気力学者。カリフォルニア工科大学グッゲンハイム航空研究所初代局長。カリフォルニア工科大学名誉教授。ハンガリー出身。大学教授で教育の権威である父モートンに工学に導かれ、ブタペスト王立工科大学卒業、母校の助教授、その後ゲッティンゲンで特別研究員となる。一九〇九年プラントルと共に飛行船の風洞研究により博士号取得、戦争時はオーストリア・ハンガリー陸軍で航空学を研究。二六年渡米、アーヘン研究所とカリフォルニア工科大学グッゲンハイム航空研究所で研究。米国でロケット研究に大きく貢献。国際理論応用力学連合、国際航空工学委員会、国際宇宙航行アカデミー等国際組織の中心となり、ロケットと航空機計画の基礎を築いた。

⑲ 未詳。

⑳ 前掲、イアン・カーショー『ヒトラー一八八九—一九三六』上、六〇六—六〇七頁。ヒトラーの国会演説の様子がリアルに描写されている。

㉑ 『わが闘争』は人心を壊す傑作と言われる。あるいは、二〇世紀において人間の本性を完全に消滅する記録である。ナチスの「聖典」とされていた。ヒトラーは、ゲルマン人とドイツ人の立場で、自己の聞くこと、見ることを記述した。第一部ヒトラーの自伝的記述で、ヒトラーがドイツの歴史と現状及び未来に関する考えがみえる。第一部はヒトラーが一九二四年にランズベルク要塞監獄の中でヘスらに口述筆記させたものである。出獄後、完成した第二部では、反共、反民主主義思想を述べている。基本的な主張はユダヤ人排斥とアーリア人種の優越性であり、社会ダーウィニズムの影響のもとに人種主義の「世界観」を構築している。日本語訳に、アドルフ・ヒトラー／平野一郎 将積茂訳『わが闘争』上 I 民族主義的世界観（角川文庫・昭和四八年初版、令和二年改版四三版）、同訳『わが闘争』下 II 国家社会主義運動（角川文庫・昭和四八年初版、令和二年改版四三版）、平野一郎訳『続・わが闘争』生存権と領土問題（角川文庫・平成一六年）がある。日本語版『続・わが闘争』は、一九二八年夏に口述させた草稿（アメリカ国立公文書館所蔵）の全訳である。

㉒ ヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ大学フランクフルト・アム・マイン。ドイツ西部、ヘッセン州南部のフランクフルト・アム・

マインにある公立大学。一九〇一年市当局、民衆福祉協会、商工会議所その他の諸団体の協力により設立された社会・商業科学アカデミーから発展し、一四年に法学・哲学・医学の三学科で構成される大学となった。三二年ゲーテ没後百周年を記念して現在の名称に改称された。法学・医学・哲学・経済学・社会学・教育学・神学・歴史学・数学・物理学・化学・生物学など一六の専攻分野をもつ。

⑳ ヴァルター・ブラッツホフ(原発音ならブラツォフ)(一八八一—一九六九年)のこと。エルバーフェルトの寶石商の息子として生まれ、一九〇一年から、グライフスヴァルト、ハレアンデアザーレ、ベルリン、ボンで歴史を学び、一九〇五年に博士号取得、一九一二年にボン大学でフリードリヒフォンベツォルトの下で教授資格を取得した。一九一五—一六年に看護兵として第一次世界大戦に参加し、鉄十字章を受けた。一九一九年にはボンで員外教授に任命された。一九二三年にフランクフルトアムマイン大学で中世史および近代史の私的教授の職を得た。一九三四年八月から一九四四年まで、ブラッツホフはエルンスト・クリークの後任として、フランクフルト大学の学長を務めた。学長として、フランクフルト大学の閉鎖を巧みに食い止めた。一九三七年、ドイツ歴史学者協会の会長を引き継いでいる。ブラッツホフはフランス史の専門家であり、重要な入門書を著わした。学長になった時、彼には歴史学の著作のための時間はほとんど残されていなかった。戦争中、ブラッツホフはテオドル・マイヤーとともに、「リッターブッシュ活動」における「人文科学の戦闘配備」の歴史学部門の指導者になった。一九四一年三月、アルフレート・ローゼンベルクのユダヤ人問題研究所の開所式典にゲストとして参加した。ブラッツホフはドイツで最も収入の高い歴史学者の一人だった。一九三三年から親衛隊の支援メンバーであり、一九三四年から国家社会主義教師同盟および国家社会主義講師同盟に、一九三七年から国家社会主義ドイツ労働者党に属していた。一九四五年、ブラッツホフは政治的理由により解雇された。それ以後、一九二三年に結婚した裕福な工場主の娘カティンカ・ヘロイスとハーナウに住み、没した。非ナチ化裁判で、彼は一九四八年に「協力者」として等級づけられた。

㉑ インド・ヨーロッパ語族ロマンス語派の言語を母語とする民族の総称。ヨーロッパでは、イタリア・スペイン・ポルトガル・フランス・ルーマニア人などが含まれる。現在のフランス市民の大多数が母語とするフランス語は、ラテン語を起源とするロマンス語の一つである。フランス語はその発展途上で、ラテン語以外に、ローマ以前のガリアで用いられていたケルト語、ゲルマン系の

古フランク語、そしてノルマン語の影響を受けている。

⑲ ガンジーが提唱したサティヤグラハ（ヒンディー語の「真実と愛から生まれる力」）運動。はじめてこの運動が提唱されたのは一九〇六年南アフリカ政府がすべてのインド人に指紋を登録させる法律を制定したときだった。ガンジーは反英抵抗運動にも、この非暴力不服従を武器にして戦い、二〇年にはインド国民議会派の正式の闘争方式となった。インド政府の法令を無視する、イギリス人官吏の命令には従わない、税金を払わない、ストライキをするなどの手段がとられた。

⑳ ガンジーがチャルカーを手にして、外国製の布、外国風の衣服を排斥し、手紡ぎ、手織りにいそしむように説いた。インド的なものを再発見し、民衆の民族意識に訴えようとする目的だった。

㉑ 『孟子』公孫丑章句上（内野熊一郎『孟子』新釈漢文大系四（明治書院・平成一六年、五二版、一〇四―一〇五頁）。

㉒ 『三国志』蜀志・馬謖伝、裴松之註。

㉓ 民主党―アメリカ建国当初、合衆国の政治をリードしたのは東部商工階級の保護育成をめざすハミルトンらのいわゆるフェデラリストの一派であったが、その政策は当然西部・南部の農民の反感を買い、反フェデラリストの民主共和党が台頭して「大地を耕すもの」を尊び、州権論の憲法解釈をとるジェファソン大統領を選させた。これが民主党の源流と言われ、これによってフェデラリストは野党として影を薄め、「ジェファソニア・デモクラシー」の高まりとその影響は第二次対英戦争を経過してフェデラリストの政策をも包含、「感情融合の時代」なる民主共和派の二党政治時代を現出せしめた。しかし西部の大発展、産業革命、南部奴隷制の拡大、普通選挙の拡大、政党組織大衆化などによって民主共和派の二党政治もようやく動揺し、党内に東部労働者、職人層、西部・南部の小農層を代表する左派が台頭。一八二八年西部の代表者ジャクソンを大統領に送って民衆中心の政策を展開、呼名も民主党と改めた。為に東部代表のJ. Q. アダムズやH. クレーの一派は国民共和党（のちホイッグ党をへて共和党へ）を形成して民主党一党時代は終わった。四〇年代から五〇年代初めには党の主導権は南部奴隷主が握り、その利害に沿って連邦政治を動かしたが、奴隷制問題の表面化とともに、党内も南北両派に分裂して南北戦争を迎え、その後二期大統領を送ったのみで長期に渡って共和党に政権を奪われた。しかし、共和党による金権政治と革新主義の風潮は民主党再台頭の好期となり、ようやくウィルソンを大統領に当選させた。第一次世界大戦後の「常態への復帰」時代は、共和党に抑えられたが、二九年の世界恐慌を転機と

してF. ルーズヴェルト大統領を当選せしめ、修正資本主義のニュー・デール政策を展開した。第二次世界大戦までの民主党は諸利益層の均衡政党として、とりわけ大衆への歩みよりを目指して伝統的な低関税政策、社会保障政策、孤立主義外交を展開するなど、共和党の金権の傾向とかなり対照的であった。第二次世界大戦後は国際情勢とも関連してフェア・デール政策などの積極外交を展開するかわら福祉国家の実現をとなえるなど、合衆国の置かれている現実を踏まえた政策を展開しようと苦慮しているが、共和党もこの点においては軌を一にしている。

共和党一八五四年カンサス・ネブラスカ法案が提出され、ミズーリ協定の廃棄と住民主権の名による奴隷制の準州拡大の危険が高まった時、北部及び西部の広い層に衝撃を与え、奴隷制拡大反対運動の全北部の結集が要請されて成立した。ホイッグ党及び自由土地論者を基体とし、五四年七月に州の大衆集会でこの名が採用された。北部の商工階級、西部の農民、全米の職人労働者などの広いフロントの上に南部奴隷制拡大反対の方向を明確に打ち出し、民主党と鋭く対立した。五六年の大統領選挙戦にフレモントを立てて敗れたが、六〇年には自由土地主義と保護関税を党是としてリンカーンを大統領に当選せしめた。南北戦争中、新興産業資本家層が党内に台頭して党の主導権を握り、戦後奴隷制崩壊後の再建政策を産業資本の急発展に利するように展開して再建過程を混乱せしめ、保護関税政策を基幹として産業ブルジョアの勝利を確保した。その後約五十年間合衆国政治史を主導して上院を抑え、クリーヴランド以外すべての大統領を当選させ、保護関税、金本位制公有地払い下げ、鉄道振興などの悪弊が甚だしくなり、党内革新派派七十年代初めに自由共和党を分派せしめて腐敗政治の弊を改める動きを示し、また十九世紀末からの歴代共和党権派独占資本の形成と帝国主義への進出を基礎づけ二十世紀初頭には党内から革新主義の運動を台頭せしめるなどの動きが見られた。第一次世界大戦後も世界恐慌の時期に至るまで四期政権を掌握し続けた。第二次世界大戦以後民主党と政権をほぼ交互に担当しあい、両党の同質化も指摘されているが、大資本中心の体質はより濃厚である。

③〇 保守党―それまであったトリー党の新しい呼称。一八三〇年代以降、次第にトリーに変わって用いられるようになった。フランス革命の勃発以来一八二〇年代までは圧倒的なトリー優越の時代でホイッグの凋落が甚だしかったが、産業革命の進展による社会変動、ブルジョアジーの興隆、自由主義の傾向の増大といった新しい社会状況の転換は、一八三〇年代から四〇年代にかけて、従来のホイッグ、トリーの両党派を、概していえば商工業の利益を代表する自由党と農業の利益を商工業の利益に優先させ

保守党とに再編成することになった。第一次選挙法改正問題でホイッグ党に敗れた後、トーリー派ピールの指導下に保守党として再出発したが、穀物法廃止をめぐって分裂（一八四六年）、自由貿易派の主力派自由党に吸収され、残った保守派がディズレーリの指導下で時代に相応するように立て直され、やがて六〇年代から八〇年代にかけて、グラッドストーンの自由党との間に古典的な二大政党を展開した。しかしアイルランド問題による自由党の分裂（一八八六年）を契機に、やがて自由統一党を抱き込んで統一党と呼ばれるようになった。第一次世界大戦後、労働党の進出によって、自由党が没落したため、その保守的分子を吸収して労働党に対立し、現代の二大政治の一翼を担っている。

自由党―それまでであったホイッグ党の新しい呼称。一八三〇年代から五〇年代にかけて次第にホイッグによって用いられるようになり、ホイッグはむしろ自由党内の地主貴族を意味するようになった。自由党としての出発は一八三〇年で、ブルジョア階級による選挙法改正運動を支持して政権を獲得（グレー内閣の成立）、以後、コブデン、ブライトなどのブルジョア急進主義者を党内に包摂し、第一次選挙法改正（三二年）、救貧法改正（三四年）といったブルジョアの立法を議会で成立させた。その試しばしば純粋にブルジョア階級の政党と見誤られるが、内閣の首班がグレー、メルバイン、ラッセル、バーマストンであったことから知られるように、少なくとも六〇年代中葉に至るまで、党の主導権を握ったのは地主貴族（ホイッグ）であり、その意味では、保守党と同様、地主階級の政党であった。しかし、五〇年代中葉以降、ピール派に属したグラッドストーンが自由党に参加し、党内に地歩を築くに從つて次第にブルジョア的、ペーリリタンのな性格を強めるようになり、バーマストンの死（六五年）後、グラッドストーンの覇権が確立して、党内ブルジョア急進主義派の要求がストレートに政策化されるに至った。六八年から七四年に至る第一次グラッドストーン内閣は、ブルジョア自由主義の絶頂期で、この時、二〇年代このかたの関税引き下げ対策が完成されたほか、アイルランド国教制の廃止、国会議員の無記名投票、司法改革、陸軍士官職官制の廃止といった多方面にわたる自由主義の改革が断行された。しかし、それ以後は、帝国主義の発展、大衆社会化状況の進展という歴史状況に対して次第に適応機能を喪失し、八六年、自治をめぐって党は分裂し、保守党に政治の主導権を奪われるに至った。二十世紀の初頭、ロイド・ジョージの指導下に労働者階級の要求を先取りして一時勢力を回復するが、労働党が進出するにおよんでその存在理由が失われ、進歩派労働党に、保守派は保守党に吸収されて少数党に転落、今日にいたっている。

労働党—民主社会主義を信奉するイギリスの労働者政党。一九〇〇年に独立労働党、フェビアン協会、労働組合会議らが労働代表委員会を結成し、〇六年の総選挙で成功を収めて、労働党に改称。第一次世界大戦に大きな影響を受け、一八年に党組織を改革し、これまでの団体加盟のほかに個人加盟を認め、「労働党と新社会秩序」という社会主義綱領を初めて採択した。二二年の総選挙で第二党となり、二四年にはマクドナルドが自由党の支持を得て第一次労働党内閣を組織したが、少数党内閣のため自由党の介入をうけ、ソヴィエト・ロシアの承認のほか、ほとんどなすところなかった。ついで二九年に第二次労働党内閣を組織したが、世界恐慌の波を被り、マクドナルドは党を離れ、自由党や保守党とともに連立内閣を組織した。三一年の総選挙に大敗。第二次世界大戦勃発後、ファシズムとの戦争のため、党首脳はチャーチルの戦時内閣に入閣。四五年第二次大戦終結後の総選挙で圧勝し、アトリーが第三次労働党内閣を組織し、イングランド銀行や炭坑など重要産業の国有化と社会保障の拡充に努力したが、五一年の選挙に敗れ、下野した。六四年の総選挙で圧勝。しかし内政や外交の失敗のため、七〇年の総選挙では保守党に敗北したが、七四年の総選挙で再び圧勝。七九年以来、保守党に政権を奪われている。

③① マンシュタイン(一八八七—一九七三年)。一九三九年九月、ポーランド戦でルントシュテット元帥の参謀長、次いでフランスへの電撃侵攻作戦立案に参画した。一九四一年、東部戦線で軍団の指揮をゆだねられ、機械化装甲部隊を駆使してクリミア地方を制圧、セバストポリ要塞を包囲して四二年七月に陥落させ、元帥となった。レニングラード包囲戦に転戦し、さらに四二年一月スターリングラード攻防戦でソ連軍の逆包囲に陥った第六軍の救出にあたった。しかし、スターリングラードの死守を厳命する閑職にまわされた。四五年戦犯として服役、五三年釈放された。

リデルハートは、「ドイツの將軍達の中で恐らく最も有能であったのはエリヒ・マンシュタイン元帥であろう」「他のどの將軍よりも機械化された兵器のことをよく知っていたし、すぐれた戦略感覚を持っていた」「機動性という近代的概念と、軍を操るといふことについての古典的なセンスと、技術的な細目と、大きな迫進力とを兼ね具えていたこの恐るべき強敵」とマンシュタインを高く評価している(B・H・リデルハート『岡本鐮輔訳『ヒトラーと国防軍』原書房・二〇一〇年、六二—六五頁)。

(鈴鹿大学教授)